

『私の 1960 年代』

2016 年 02 月 06 日

山本義隆氏の『私の 1960 年代』を興味深く読んだ。山本氏は「東大全共闘代表」として活躍した人で、1960 年代から現在までの、ご自身の経験と社会との関わりを率直に書いている。誠実で心優しい人だと思った。塾の講師をしている間、科学思想史を研究したそうで、科学と技術が歴史に与えた影響について、西欧と日本の実情を論述している。日本は開国後、西欧科学を受け入れていったが、それは「富国強兵」に用いられた。そして、目的は「強兵」で、そのための「富国」であった。東京帝国大学は「日本帝国」のために働く人材を育成した。科学技術が求められ、理工系の学者・学生たちが優遇された大学教育であった。戦後も変わることなく、功利的で安易な科学への信頼は続いていった。少し長い引用になるが、下記の文章が、山本氏の基本的な主張であると思う。

「わたしの言いたいのは、つぎのことです。戦時下では、絶対天皇制と国家主義思想のもとで国家のために一身を捧げるように多くの理工系の学生が教育されたのです。戦後、主権在民の民主主義社会に変化した過程で、おそらく大多数の学生は、一身を捧げる対象を企業にきりかえて、意欲的・精力的に働いたのでしょう。技術者というのは技術そのものに関心を寄せているから、思想的な葛藤もあまりなかったのだと思います。こうして帝国憲法の戦時下であれ新憲法の戦後であれ、割り切って目の前の仕事におのれの知識や才能を傾注していった「成功者」の「成功談」が脚光を浴び、戦前戦中の科学教育が戦後に果実を産んだというこの手の安っぽいストーリーが無邪気に語られ、ひいては戦時下の技術者教育がいかに優れていたかがしばしば提言されるわけです。それにたいして私がひっかかるのは、このようにして戦前戦中の工学教育や理学教育の戦争責任が不問に付されていることにあります。戦時下で日本のファシズムに協力し翼賛体制に迎合した文学者や文化系の学者たちは「日本精神」なるものを説き、戦意高揚を煽りました。理科系の学者も、同様に国策にのって「日本科学」を説き、科学振興を唱えました。戦時下で科学振興を声高に語ることは端的に翼賛だったのですが、この点については左翼文化人も良心の呵責なく語る事ができたのです。そして「日本精神」といった国粹思想は戦後になって批判の対象になりましたが、科学へのこの信頼は、大日本帝国の敗北によっても無傷で生き残りました。」

東大闘争は医学部から始まったが、全共闘の学生たちの問いかけに対し、東大総長、教授会、そして丸山眞男氏は語っていることとやっていることが乖離していたと、山本氏は厳しく批判している。60年代のはじめ以来、民主主義と平和と科学技術の進歩は絶対的なプラスのシンボルであった。しかし、このことに疑問が出るようになった。民主主義は少数者が取り残され、平和はベトナム戦争に加担するようになり、科学技術は発展の影で公害を生み出していた。これらの疑義に対し、学生たちはラディカルな問いを発し、闘争を展開した。彼らの主張と闘いは広範な国民的支持を得ていた。しかし、大学は機動隊を導入し、学生運動は国家権力によって圧殺され、正常化されていった。

山本氏は、産学共同・官学共同体制が大学の独立性を損なっている、殊に、原子力工学と電力会社や原子炉メーカーの癒着を厳しく指摘している。「大学の自治・学問の自由」など、夢のまた夢という状況にある。「おわりに」の項に「今や戦争とファシズムの前夜のようなことになっています」と書いている。国家と、国家に結び合った企業の中に大学も個々人も飲み込まれていく恐怖を感じた。